

新譯日本地學論文集 (一六)

ライン——中山道誌 (二)

一、京都から美濃境まで

國道を京都から東すれば間もなく山城と近江の國境を越し、次いで近江國を貫いて通る。路は大津の下で琵琶湖の南端に觸れ、其の先きは湖の南東岸から稍離れて通じ、終に湖の北東で東行して國境山地を趣え美濃の方へぐるりと廻つて行く。草津まで最初の間、中山道と東海道とは共同である。兩道の終點は共に緯度三十五度下にある。こゝは云はゞ古典的の土地である。我等の通つて來る各地、我等の越える丘と橋、我等をまわつて遠く近くに眺められる山と寺、それ等は凡て此の國古い言ひ傳へと豊富な中世の歴史の上に著しい役目をしたものである。開化した若い日本人は、吾人が海の方へ或はアルプスの方へ向つて追求すると略同じ度で、彼等の古英雄の場所及び事蹟の舞臺を見んとして其

の方へ向つてぐるりを見つめる。何はさて措き京都を訪れるのは彼の願望である、このあこがれの古き市には千年以上もたつた豊富な歴史に關する無限に多い聯想があり、多數の有名な寺院と、慰樂の地と、整頓された街路と快よい周圍とがある。東と北と西とを近く遠く圍む山列と丘列とは藪と森とで被はれてゐる。佛塔と寺の屋根とは到る處山の麓や頂近くで樹々の綠の中から聳え立つてゐる、市民は夏時こゝに待ち焦れた夕涼を追ひ、より美しさものを考へられぬまでに眺望の快を取るのである。就中加茂川から市がその方へ漸次高まつて來る東の山脊なる東山は其の尤なるものであつて、茶亭及びそれに類した享樂場の數百が快を取らんとする住民を待つてゐる。

帝と將軍の古い住城を有し、陶器以外の最も

重要な工業の中心と商店と主要交通路としての寺町を有する京都の大部は既述の如く加茂川の右岸に横がつてゐる。この部と市の東側を連ぬる多くの橋のうちに最も古くて最も有名であるばかりでなく、づぬけて美しい三條橋がある、寺町はこの橋の方へのびてゐる。此の立派な木橋は秀吉の築造した所ださうであるから既にやがて三百年経つてゐる。ケンプエルは Sansi'-no-tas と書いてゐるが彼によると長さ二百エツレ(註は二尺一寸)ある。然し加茂川は大雨の後のみ河床全體に水を湛へ、他の時は淺くて、京都の西側にある桂川即ち大川(おおがは)より水が大層乏しい。水のない花崗岩及び珪質粘板岩の礫の上には白木綿の長い布が晒され、此の際水を布に濯ぎかけるに如露を用ひずにシヨベルが使はれる。加茂川の澄んだ柔かい水は特に布晒しと染色の目的に對しては盛名を有する。

夏の夕には面白い快活の生活を三條橋から河の上と岸とに見る。そは毎夜こゝに擧げられるイタリヤ式夜祭であつて、こゝで享樂すること

の出来る涼しい新鮮な空氣が第一に此の祭に人を誘つて來る。この目的の爲に水上に輕い棧工事が建てられ、打開いた板造りの座敷が造られ、夥多の相隣せる茶屋からこゝにかけられた小さな歩み板で行く様にしつらへられてゐる。多様の形と大さを有つた數百の美しい色の提燈がともされてこの臨時の建物や數多い小舟のまわりや家々の張出し椽と廻廊とを飾る。住民のあらゆる階級からの饒多の會合がこゝに行はれ、茶、酒、歌、三味線を前にして快活で嬉々としてゐる。東京にも同じ夏の夜祭りが隅田川の上で開かれるが京都のを眞似たもので、毎年の川開きにはいつも大變な人出である。

三條橋から市の北東に高さ八百二十五米の比叡山を望む。この山は加茂川と琵琶湖との間にあつて山城近江境上の分水界に於ける二番目に高い高まりである。併しこの山が日本の最も有名な山になつたのは其の高さではなく多くの歴史的聯想である、何故ならば數百年間此の山は佛教の本城であつて國內のどこにもない様な權

力と光耀とをここに開展したのであつたからである。

第五十代の帝桓武天皇は今日の京都に平安城を建て又此の僧院を初めて置かれた、時のたつに従ひ三千の僧を有する約五百の寺院と僧舎に膨脹し國家に於ける大きな勢力を形造るに到つた。王族が管主になつた。寺は王城の鬼門即ち精確に北東に位する、此の方向は佛教的迷信によれば凡ての禍が來る方角であつて、長い單調な祈禱、大太鼓を間斷なく叩くこと及び鐘聲によつて平安城から禍を離さねばならなかつた。東京の北方、上野にある有名な東叡山は一八六八年の内國戰の時に炎上したがこゝは徳川將軍の城の北東に當つて其の守護たるものであつた。昔時の光榮からのたゞ弱い跡方即ち多幸なりし時ではなくとも興味のあつた時代の最後の證人を僅に残してゐる。この跡を見物すべく予等は一八七四年京都から比叡山に遠足した、頂上まで二三時間で達せられる。路は豊饒な谷地から白川村を通つて緩かに山上に向つて附いてゐる。

る、白川の近くには美しい灰白色の花崗岩を採石してゐる、花崗岩は正に全山の基磐を作つてゐるが、時代未詳の粘板岩が殆んど何處でも花崗岩の上に在る。比叡山の峻しい峯は玄武岩質である。(註これは誤認でホ)絶頂の下の廣い鞍部の北東側に當つて美しい杉林の中で我等は三の寺院と之に接した種々の僧房に出逢つた。嘗ては盛なりし場所は全體に荒廢してゐる、寺は閉ざれてゐる。微の臭ひが其の部屋部屋から迸り出てゐる、前栽の厚い苔の褥をぬけて普通の石松(Lycopodium clavatum)の枝が絡まつてゐる。かくして此の世の光榮は亡びる！(Sic transit gloria mundi!)

この榮枯を起した原因を尋ねると先づ第一にケンプエルが「暴君」と呼んだ信長の名を挙げねばならぬ。一五四二年から一五八二年の間に内亂のたゞ中に信長は帝國の權力を掌握せんとする戰士として先頭に立ち、足利將軍を滅し、彼が其の勢力を破つた桑門の敵となり、其の精神は彼には判らなかつたが基督教の友ではなく後

援者となつた。ジェスウィットの教父クラッセ
エ (Crasset) が日本西教史中に於て彼に與へた
稱讃は上に引いたケンプエルの陳述^(註) ラインの
記事にはケン
プエルの日本誌を參考し
て書いた所が少くないとも彼の傳記中の多くの事
實とも一致しない。織田信長は平氏の一族であ
つたが、此の宗族たることは彼の權勢の位に昇
つたことには與つてゐない、この顯達は寧ろ專
ら秀でたる軍略と限りなき功名心の結果であつ
た然しこの才幹にも拘らず平和を渴仰してゐた
國內を必要な平靜に歸することは彼の手に落ち
なかつた。功名心と邪推とで近親者の生命を蔑
にした者、特別の神に祀らるゝ權利が死にし者
にのみありと主張して其の彫像を以て神像に換
へ之に崇敬を拂はせ様とした者は他の凡ての高
邁な天資を持つて居つても基督教の精通者でも
親友でもなかつた。佛僧に對する憎惡からと危
險のない安價な協同を得る爲めとで彼は新しき
教への弘布を援けたのであつた。第一番に比叡
山の精舎が彼の憤怒に遇つて、殊に僧侶は再三
再四敵に避難場と守護とを乞ふた譯であつた。

彼が一五七一年に寺院を火と劔とを以て剿滅
する様に部將に命じたのは比叡山と伽藍との見
ゆる中山道の瀬田の琵琶湖の流出川近くであつ
た。其の古いことゝ名聲に關する凡ての暗示と
凡ての哀願とが命令を撤回するに効がなかつた
信長の答が響き渡つた、「佛僧共は予が命に服せ
ずして常に惡黨共を援けて王師に反抗した。今
にして之を片附けなければ憂患は永く續くだら
う。加之僧達は戒律を踏越えた」と予は聞き及ん
だ、彼等は魚と嗅のある野菜を食し、^(註) 五菜は韭、薤、
葱、薤をいふ佛教が食
することを禁ずる五つの葱類は^(註) 薤、葱、薤をいふ薤、え
ぞねぎ、葱及び玉葱である^(註) 五菜は韭、薤、
葱、薤をいふを蓄へ、讀經せずに經典を捲いて了つてゐる。
どうして彼等は惡に對する防禦者で正義の守護
者であり得よう?」——翌日命令は遂行され、
生命はいたはられなかつた、寧ろ火に残つたも
のが劔を以て絶滅された。

三條橋から路は芝居街を通つてゆく、芝居小
屋の破風に種々の脚本からの場面が美しく描き
出されてゐるのは見世物動物園の板壁に稍似て

ゐる。それから市の東場末である粟田に達する粟田は天津に向つて長く延びてゐる。こゝは工業區であつて、他にもあるが粟田焼と稱する美しい磁器が製作される、これは薩摩焼に似てゐるが其の稍丈夫でないこと、淡黄色の色調があることとで薩摩焼と容易に區別される。ここから街道は郊外に進み入つて緩かに高まつて行き日の岡峠と大津峠の二つの低い鞍部を越し、急に下つて琵琶湖畔の大津町に達する。三條橋からの全行程三里である。此の間は僅かの例外はあるが兩首都間の最悪の路程である。此が原因は多くの牛車を通る爲めで、大津と西京との間には甚だ活潑な車の交通を絶やさな、これで中央及び北方の國々の最近の米、他の糧食、茶絹、其の他の産物を運んで来る。

輪の高い大八車は特に鈍重な車で、路上及び大きな鋪石にさへ深い溝を附けた、ずつと昔に鋪石して路を良くしようとしたのであつた。(一八七五年の晩夏に予は兎も角この路が著しく悪くなつたのを見た。少し以前に孔と深い轍の跡

が埋められ一部分は其の上石で固められた、それで人力車ですら通る事が出来た。ヒュブナー男爵が見聞した當時は彼の主張するにも係らず「良く保持されて」ゐなかつたことは確かであつた。(註) ヒュブナー男爵の旅行記は Baron J. A. de Huebner, Promenade autour du monde en 1871. Paris-1871と題す、英譯本) 車輛には一片の鐵もなく猶ほ鐵の轍もなく、轍は寧ろ造作もなく木で造られてゐるにも拘らず溝が路上に出来るのである。木の車輪が強靱であることよりも車大工の熟練なことに驚く、車大工は鐵釘と鐵螺旋ねじとを用ひずしてかゝる車輪に必要な堅固さを持たすことを知つてゐる。輓獸の多くの力は強い車軸の上に於ける車輪の摩擦によつて失はれて了ふ。車輛と同じく強い黒色か或は暗褐色の牡牛の力曳にも不得策がある、何となれば此の國では家畜の去勢が行はれてゐないから、かく力曳するのは固有の力を以てするのであるからである。輓は額上に堅く附いてゐないで獸の頸に動く様に附いてゐる、力を出すのは主に頭に集注されてゐないで胸にある。この遅鈍な輓獸の各は鼻に環

を通してゐて牽綱がこの環を通つてゐる。足には馬の場合と同じく藁沓をはいてゐて、いつも豫備として二三足を携帶してゐる。

附近に粟田焼の原料の一なる日ノ岡土^{つち}が出る第一の高まり日ノ岡峠(E・ケンプエルはFinoo—Kabygeと書いてゐるが彼の記したものには日本に關する多くの古記録に於ての如く固有名を屢見分けのつかぬ程誤り傳へてゐる)を越えた、後、路は平坦な谷盆地に下り、其の中にある山科と追分といふ處を通つて行く。ケンプエルは山科近所の煙草栽培と竹とに就き、又追分に於ける盛な種々の工業に就いて述べてゐる。事實追分は今日でも猶甚だ賑はしい田舎町で家並は街道に沿うて長く伸び、今でも相變らず二百年前の様に錠前鍛冶、挽物師、彫刻師、衡器師、針金工、繪畫商及び神佛商がもとの様には榮えてはゐぬが業務に従つてゐる。これよりももつと人を驚かすに足る他の現象がある。即ち旅行者が長い村邑を通つて行くと、右左りの茶屋の打開いた座敷から、腰をかけて休んで行く様に、

多くの茶屋女が叫ぶ様に呼びかけて人に迫るところである、同じ事が殆んど孰れの通行人にも繰返される爲め、女中は一日中には到頭囁聲になつて了ふ。我國(獨逸)ではもと此の茶屋と給仕とに對して全く誤つた考へが、此等を悪い職業の家及び人として説くことによつて傳へられてゐた。彼等は決してそんなものではなく、概して全然尊敬すべき飲食店なのである、そこで人々は休み、僅かの物を飲食ひし又はより大きい食事を攝る。女給仕は小綺麗な服裝^{なつり}をして居、大に愛想がよく、氣分が花やかであるが、舉動は閑雅^{いんや}である。『お休みなさい』(又『お寝みなさい』)によく使ふ)又は何か他の句の呼びかけは屢々甚だうるさいが古い罪のない習慣であつて、主要交通路上に明らさずな大な競争を起した、然るに國內邊陲のわき路では之を見ないが、行客の多い靈場や眺望のよい處の近邊には又之を見るのである。

我等が腰かける様にとの勧めに従つて暫時休まうとして椽側か又は蔭蔭の敷れた腰掛けに腰

を下ろすとすぐに急いで火鉢を持つて來、其の赤々と火のついた炭で短かい煙管に火を點けることが出来る、又小盆の上に茶の入つた小茶碗をのせて出す、猶も其には小な土瓶が添へてあつてもつと渴してゐる際には注ぎ足すことが出来る。次に天氣に關する思付きや、我等の旅が何處から何處へとの問ひや他の事柄につき、知らぬ人のない類の事を話しかけて、到頭勘定をし、出掛けて『さよなら』と一緒に街道の全群集が我等を見えなくするまでも愛想を續ける。

追分は街道の分岐を呼ぶ言葉であつて中山道上に幾度も繰返される地名である。ここに云ふ追分で一つの道が主路から分れて南西に向ひ谷を通じて伏見の方へ、遠くは淀と大阪の方へ遠ざかつてゆく。

追分から街道は又もや少し上りとなつて大津の峠の上に登つてゆく、峠ではすぐに琵琶湖上へと美しい湖の周圍との眺望を享樂することが出来る。追分に到らぬうちに既に左手の路の北方に、遠く離れて比叡山を、右手にはクニツピ

ングが地圖に小山と註記した男山が見える。男山には大きな有名な神社がある筈だ。(註クニツ山には行者ヶ森北麓の部落である。ラインはケンプエルの『右手』に書いてあるのを後に見て、これを遠い石清水の男山に該てたものである。旅行當時神社が目につかなかつたのでこの文を書くとき男山ならば神社がある筈だとしたので従つて追分の南の山を男山といふ。)

大津 ケンプエルはかう云つてゐる、『Otsu

即ち Otsu は近江國第一の小事にして都よりの街道に當り、長く臂の如く貫通したる中央の街一筋と雑多の横筋とを本體とし、同時に凡そ一千の小さき農家と市民の家とより成れり、其の間に猶立派なる旅宿數舍ありて何れも輕佻なる女人を缺かず』——此の記述に依つて先づ第一にかういふことを敢て結論する、即ち約二百年前には大津は今日よりも甚だ著しからざる處であつたことである、何故ならば日本では通例毎戸四人半から五人の人口を數へるから此の町は其の當時は今日の四倍の數に對して多くとも五千の人口を有つたからである。臂の様な本街道

はなほ保存されてゐる。この街道は琵琶湖岸に平行して北西方に延び、遂に山の上へ大津峠及び京都の方に向つて南西に曲がつてゐる。旅宿に於ける『女人』に關しては、ケンプエルは彼の著書の多くの他の所に於ける様に誤つてゐるのであるか或は爾來風習が著しく改良されたのかである。ケンプエルが又言及してゐる様に大津は江戸に在住した將軍（註 原文には 皇帝とある）の領地であつた、實際ケンプエル、ツンベルゲ、ジェスイト教徒及び早い時代の他の著者等は帝みかどを稱するにいつも内裏即ち言葉から云へば「皇帝の宮殿」を以てした。

今日の大津は又其が屬する郡の滋賀郡に従つて滋賀といふ名を有する。大津は滋賀縣と呼ぶ縣の首市であり、其の都合よき位置の爲めに甚だ活躍してゐる商業取引を有する。東山道及び北陸道の近接諸國の米、茶、絹、紙、陶器及び他の物産は大津を経て京都の方へ或は伏見及び大阪の方へ達する。逆に兵庫からの輸入物の一部は滋賀を経て内部の方へ道を取つて進んで行

く。從來京都との商品運送がそれを以て行はれてゐる大入車と牛とに就いては既述した。國內の何處でもこの様にそんなに多くて、そんなに美しく力強い牡牛が役立つてゐない。

若狹越前加賀等の日本海岸諸國と交通する重要な運送方法として琵琶湖上に舟運が行はれて居る、舟運には今では小蒸汽船をも用ひてゐる。然し之と共にやがて出來上る京都大津間の鐵道を琵琶湖岸に沿うてタノウラ（註 所在未考或は飯ノ浦（ハンノウラ）か）附近の琵琶湖の北端へ、而して後遠く敦賀の要港へ延長することが注意されてゐる。

工業的關係では大津はたゞ此處で製造される多くの算盤を以て著しとする。

日本人は一つの町を記述するに當つてはそこと其の周圍にある寺、山、河湖、秀でた樹木及びかゝる物を名所として枚舉するを以て初める。

大津の頂點とする所は云はずと美にして大きな琵琶湖と之を圍繞する場所、寺院、山岳の光景である。日本人は琵琶湖の形を琵琶に擬へて其の名として居る、此の比喩は誰れもが認容する

であらう様にヒュブナー男爵が『不規則は四角形』としたよりも遙かによく當て倣つたものである。近江國の中央にあり且大阪、若狹、尾張の三灣の間に介して湖水は南南西から北北東の方へ長さ約八哩延びてゐ、北部に於て最も廣き所で幅二哩ある。其の面積は略ジュネーブ湖に等しい。美しい緑色の水面は海拔約百米に在る（クニツピング氏が天津の高さを百四十四米であると述べてるのは疑もなく誤に陷つてゐる、夫は追分と草津との高さから見ても明かである）、最深八十五米あるらしいのもたゞ二三の箇所之に達するのであらう。多くの村落とよく耕された田畑が湖水を取り巻いてゐる、田畑は南方を除いた凡ての側で、漸次森のある山に高まつて行く。二つの小さな岩の島が湖中から出てゐ、夥多しい鵜と鷗と他の水鳥とが棲んでゐて専ら魚を漁つてゐる。湖水に潜んでゐる魚のうちで最も主要な且つ最も普通なものとして鯉（*Cyprinus haematopterus*）鰍（*Carassus Langsdorffii*）鯰（*Silurus japonicus*）鮎（アイと發音する）（*Plectoglossus altivelis*）鰻（*Anguilla japonica*）を擧げる。此の外著しいものは鳥介、立烏帽子、蜆、河蜷、田螺の種々の種である。近頃レオン・メチコフ（*Leon Metschnikoff*）は彼の『日本帝國』中に湖中に山椒魚の存在するといふ古い時の誤を又再現してゐる。水は極めて清潔であり、周圍は明媚であるにも拘らず、其が入つてゐる景觀の規模大なる琵琶湖はアルプスの湖沼と拮抗することは出来ぬ。然しこは歴史に富み傳説の豊かな土地であるから、日本人に取つては到處史的興味が美しい風物となつて土地と合一してゐ、且つ日本人が其の爲めに此の盆地を國の一大名所に數へるに足る資格を之に與へるのは宜なりといふべしである。

小蒸汽船つく大津波止場の傍の美しい所にある宿屋の椽に立てば、湖水の八景の種々なものを観ることが出来る、實に又三井寺の夕暮の鐘（三井の晚鐘）の廣く響き渡る調べを聴くことが

出来る、日本人は此の鐘聲に傾聴する。同時に快美の所にあつて有名な三井寺の地境は遙かによい眺望を供してゐる。こは町の北西に當り既に述べた加茂川と琵琶湖との間の山連の東側に於ける高まりの上にある、この山連は猶北に亙つて比叡山と比良山とで最も高い峯をなしてゐる。三井寺は支那から起つた天臺宗に屬し、中世紀に於て權勢と尊崇とに關し少しく比叡山の寺院の下に位した、今日でも尙ほ然りであるが、政府が其の豊かな收入を甚しく制限し且つ噂さの様に僧侶の數を三百人に減じたとは云へ瞑想的佛教の秀れた道場である。——高い石段を登れば寺のある廣場に達する。こは絶美なる公園のたゞ中にある美しい位置に在る。然し觀るべきものはこれから遠からぬ公園内にある一大梵鐘であつて、次に述べる來歴を有する。危険な百足を殺した勇士俵藤太は琵琶湖底の地下宮殿なる龍宮の乙姫から御禮として立派な鐘を貰つて僧に贈つた。然し日本の巨人ゴリア

テなる辨慶は之を盗んで肩にかついで比叡山の僧侶の處へ持つて行つた、然るに鐘をつるさげてから鐘を撞かうとした時もとの音を出さず自ら『三井寺！三井寺！』といふ哀哭の言葉を出した。それで辨慶は再び之を足代から取下ろして一蹴りで之を三井寺に送つた。其の近くの高い樹々の蔭に被はれて今でも此の鐘がある。——そこから遠くない所に尙ほ又古い重い鐵の釜がある、傳へる所によると辨慶さんが之で米をたいたといふ。實際は辨慶は之を水溜に使つたのだらう。かゝる巨人に關する回想は澤山にある、例へば吉野にもそれがある。

辨慶は機智に富み且つ老獪であつた。もとは恐ろしい盜賊で人殺しであつたが後に、十二世紀の後半に存命し敬慕された日本の『剛勇にして高潔なる騎士』たる源義經の忠義な臣となつた。

近江の湖水の西方に當つて我等の見取地圖に示されてゐる比良山は森で蔽はれた長い山脊で

あつて南方の比叡山よりも稍高く、周圍の凡ての山々の中で春季に最も永く雪の頭布を戴いてゐることで名高い。

大津から約一里半で、緩かに高くなり、村と田とに蔽はれた平野の上に聳える比叡山の麓が近江の湖水に迫つて來る處に唐崎の村がある。日本人は大明神祠の傍に湖水に接して、水平に延びて種々に刈込まれた枝が周圍二百歩に横が一本の甚だ古い松を愛賞する。この唐崎大明

神の松はピヌス・マッソニアナ(Pinus Massoniana)である、然し其の大きさは文に繪に往々誇張されてゐる。太い幹は胸の高さの處で既に枝を分つてゐて、此の樹は日本人に好かれる様に我等に好かれるといふことよりもつと我等を驚かすのは其の特有の支持力である。之は好尚が遙かに異なつてゐる點の一つである。

中山道と東海道とは大津から綺麗な小町なる膳所（膳所）を通じてゆく、ここは街道の兩側に在る長い家並に六千の人口を以て集落してゐる。琵琶

湖畔に本多(ケンプエルの呼ぶ所によると Ohai-dai-Sama)の城が立つて居る、本多は近江第二の大名で六萬石の知行であつた。(一石は一八〇リットル四、昔は大名と役人との凡ての收入は米の石で決められた。一石の價值は二弗半と五弗の間に變じてゐた)。一八六八年と一八六九年との帝統治（みかど）の復古は興味ある時代の多くの他の建物を破壊した様に此の城を毀つた。

進むこと一里にして瀬田村につく、道に當つた瀬田の唐橋(明に日本語の何をも理解しなかつたケンプエルは Nito-no-tsuji に就いて述べてゐる)と呼ぶ甚だ古い有名な木橋があつて宇治川の琵琶湖から流出たすぐの處で渡る。寧ろ川の右側にある長く伸びた島が全體で二百十九米の長さがある木橋の天然脚臺になつてゐる。既にツンベルグは其の有様について述べ、殊に橋は三百五十歩の長さがあり、欄干を具へ、國風で飾られ、即ち銅金具を裝うてゐるのを舉げてゐる。ケンプエルは彼の日本で見た最も美にし

て最も大なる橋であると云つてゐる。橋下に急ぐ琵琶湖の水は浅い。

瀬田橋の近くで、一一八二年に源義仲が（彼の従兄弟なる頼朝及び義經の鎌倉から急ぎ上つた將士に對する戦争で）亡びた、之より先き彼は彼の血族を平氏より救ひ出し、平氏の後援者であつた三井寺と比叡山の僧侶を懲らし將軍になつたのであつた。——猶又多くの他の著しい事變がここに演ぜられた。傳説時代から我等は日本の龍即ち巨大な百足に關する歴史に氣附く乙姫様は琵琶湖底に龍宮を所有してゐた。其の時恐ろしい怪物の百足がゐて、瀬田橋の北東二哩の圓錐形をなした蜈蚣山（三上山）に住んでゐた、百足の體は長くて山を七巻き半した。此の動物は毎夜捲きを解いて、琵琶湖の中に體を伸ばした、頭は龍宮に達して姫の一番よい魚を食ひ食つてゐるのに尾端は尙ほ山に觸れてゐた。倭藤太（秀郷）は勇士にして、この煩累から乙

姫を救ひ、一夜瀬田橋の上に百足を待伏し、其の日に致命の矢を射た。三井寺で此の場面の繪を賣つてゐた。勇敢な射手の後ろに乙姫が立つてゐる。乙姫は其の爲めに射手に大なる寵愛を表はし、彼に澤山に報いた、就中既に述べた鐘を贈つた。（ケンプエルは他の來歴を述べてゐる。）一尾の蛇（じま）と云ひ龍と云ふものが此處の湖岸に住ひ居たりけるが同じ頃又人の身丈二倍の長さある大蜈蚣ありて、此處より二里距りたる街道傍の高き圓き岡にて、其の動物によりてこそ蜈蚣山と稱する山に來り居りて、その街道に出て、人を騷がしけるが、或夜湖邊に來りて、彼の龍の産み置きたる卵を喰ひ盡しけり。これが爲め兩動物間の大争鬭となり龍は之に打勝ちて兇敵を滅したり、後の人、此の事件を記念するために、此の村の一部にて倭藤太と稱ふる所に一祠を建立せり余も此事ありし證據として其の祠を見せられたり。『（註）主として奥秀三（第一章未完）博士の翻譯に依る。』